

研究資料

「北陸地方の百足獅子」調査報告書： その今日の実践について

田邊 元*

本稿は、北陸地方に多く伝承される「百足獅子」と呼ばれる形式の獅子舞（以下、本稿では「北陸地方の百足獅子」とする）について、2018年4月～2019年10月までに断続的に行った調査の報告である。

本稿で北陸地方の百足獅子と一括に呼称する獅子舞は、胴の長い獅子に対して天狗などの姿をした演者が刀などの武器を用い退治する形式を指す。獅子の胴は長く、複数人が中に入り獅子となる。この形式を持つ獅子舞が、石川県加賀地方から能登半島、富山県西部を中心とした範囲に渡り伝承される。百足獅子と呼ばれる形式の獅子舞は長野県飯田市と山形県長井市や白鷹町にも伝承されるが、しかし北陸地方には、それらの地域と比較した際に類をみない程に膨大な数の伝承がされている。スポーツ人類学では、これまでも一般に民俗芸能と呼ばれる対象を日本の民族スポーツと捉え対象化してきたが、本稿でもそれに倣い北陸地方の百足獅子を民族スポーツとして扱う。その上で、スポーツ人類学における問題系の遡上にのせたい。

北陸地方の百足獅子はその存在は知られるものの、研究動向をみるとまとまった研究は少ない¹。そして、その傾向は獅子舞自体の起源や伝播を問うものが多い（例えば、佐伯（2002）、橋本（2006）など）。また、自治体による地方誌などに文化財や民俗芸能として登場するが、そこでは芸

態や祭礼の行程、そして伝播経路などについて述べられる傾向がある。これらに共通する点として、対象として扱う範囲が行政区分に基本的に準じていることが指摘できる。例えば、佐伯（2002）は富山県下の獅子舞について扱っているが、その分類と伝播についてはあくまでも富山県下に限定される²。しかし小熊が指摘するように、行政区分が今日の地域社会とそのまま一致することはほとんどあり得ない（小熊 2019）。よって、本稿では先行研究にみられるような行政区分による区別は取らず、冒頭で述べたように北陸地方の百足獅子という括りで事例報告を行う。その意図は、本稿では起源や伝播を問うことよりも、今日の実態を把握することを目指すためである。本稿でみていくように、北陸地方の百足獅子は芸能フェスティバルのようなイベントにおいて地域を超えた交流がみられる。また聞き取りをしていく中で、担い手が他の地域の獅子舞を見に行くことも見出され、その交流は個々の関心と共に様々につながっているのが現状である。そのような今日的な把握は、管見の限りにおいて富山県高岡市の獅子舞を扱った平島による論考（2016）と調査報告書（2019）だけである。様々な情報が容易に手に入る今日、民族スポーツの担い手たちも個々に独自の関心からつながり合い、互いに影響し合っていると考えべきであろう。よって、多くの先行研究がとるような行政区分に従った伝承の把握や分類、また

*富山大学芸術文化学部

そこから見出される伝播や始原といった関心は、今日の実践の報告にはそぐわないと考える。以上を踏まえ、本報告では北陸地方の百足獅子というくくりを使用する。

なお、本稿では特別に断りが無い限りにおいて、報告者のフィールドワークによって得られた情報によるものとする。

I. 北陸地方の百足獅子概要

北陸地方の百足獅子は、地域社会における祭礼において行われる芸能である。その実施は3～5月の春頃か、9～11月の秋頃に集中している。1年のうちに1度だけやる地域もあれば、春秋の2度行う地域もある。参加者の問題から週末に開催されることが多い今日の事情もあり、春秋の週末にはどこかで獅子舞が行われている状況にある。

祭礼時の行われ方は、多くの地域で共通している部分が多い。その概要を示せば、朝頃から獅子舞が始まり、地域の神社である宮と、「花」と呼ばれる祝儀を出した家や地域内の班の決められた家をまわる「町まわり」を行う。石川県金沢市を中心に伝承される百足獅子³、通称「加賀獅子」の場合は、最後に宮に戻り演舞を行い終わることが多い。一方、富山県下の獅子舞は最初に宮での演舞を行い、その後日中は町まわりをし、夜には「招待花」と呼ばれる新築や結婚などの目出度いことがあった家において一段盛り上がる演舞を行い、その後は公民館などの宿となっている場所において「獅子殺し」、もしくは「ヨソブリ」と呼ばれる舞が行われるのが一般的である。獅子殺しもヨソブリも30分以上ある演目であり、もっとも盛り上がる。なお、北陸地方の百足獅子の多くに共通して、「とざいとうざい（東西東西）」で始まる「口上」が演舞時に述べられ、花を入れた家が読み上げられることも特徴である。

冒頭で述べたように、北陸地方の百足獅子は、胴の長い獅子に対して、天狗などの姿をした「獅子あやし」などと呼称される演者（以下「獅子あやし」とする）が採り物を持ち対峙する（写真1）。日本には各地に獅子舞伝承がみられるが、特に一般にも知られるのは、一人立ちと呼ばれる一人で獅子を演じるものと、二人立ちと呼ばれる二名で獅子を構成し演じるものである。それらの獅子舞と百足獅子と呼ばれる形式の大きな違いは胴が長く、中に人が多く入ることにある。加えて、北陸地方の百足獅子の特徴として「殺し獅子」といわれることがあるが、これも他の獅子舞との違いを示す特徴である。北陸地方の百足獅子は、獅子に対して天狗などの姿をした演者が採り物を持って挑み、獅子をあやし、地域によっては最終的に神ともされる獅子を殺すのである。この形式の獅子舞が分布する地域を大まかに示すと、石川県加賀市以北、特に金沢市を中心とした一帯から能登半島全域にかけてと、富山県富山市を含む、西側地域である。富山県東部は二人立ちの獅子舞で、胴は長くない。

先に述べたように、先行研究は百足獅子について、個々の県内での伝播の問題を取り上げる傾向が強く、その関心に従い分類されている。石川県下について、小倉（1984）は、加賀市以北から



写真1 上二上の獅子舞
(2019年4月20日二上射水神社にて筆者撮影)

金沢市周辺を中心に羽咋市あたりまでみられる獅子舞を「加賀獅子」、羽咋市あたりから能登半島全域の獅子舞を「能登の獅子舞」⁴とする。一方、富山県下については、概ね地域名で分類されており「氷見獅子」、「射水獅子」、「砺波獅子」、山岳部である五箇山一带は氷見獅子の伝播があったことから「氷見伝播型」、金沢市と隣接し、かつては加賀藩領であった南砺市福光町は「加賀型」と分類される（富山県教育委員会、2006, pp.2-3）（佐伯、2002, pp.242-243）。これらの分類は芸態などをもとに地域により分類されたものと考えられるが、いずれも百足獅子であり、獅子あやしと獅子のやり取りがその演技の中心にあることは共通する。いずれの獅子舞についても概ね成立したのは近世後期、早くても18世紀末くらいと考えられており、特に明治以降に拡大したという（佐伯、2002, pp.242）（小倉、2005, pp.115-116）。なお、石川県下の獅子舞のうち、1986年の時点で活動を行っていた団体は742件であり（石川県教育委員会文化課、1986, p.13）、富山県下の獅子舞は1978年の時点で約1200件ある（佐伯、2002, p.242）といわれる。現在も継続して活動している団体数は、以前よりも減少していることが予想されるが、それでも縮小等をしながら継続している地域も多い⁵。

北陸地方の百足獅子は、呼称は伝承組織により



写真2 加賀獅子の獅子
（2018年11月3日共演会にて筆者撮影）

様々にあるが、概ね獅子を構成する獅子方、獅子あやし、音楽を奏でる囃子で構成される。以下、役割毎に概要を示す。

●獅子

北陸地方の百足獅子の大きな特徴の一つは、獅子の胴が長いことにある。「カヤ」などと呼ばれる布により胴体は構成されるが、この部分のサイズが加賀獅子と他の獅子舞では違いがある。

加賀獅子は巨大であり、内部には「胴竹」と呼ばれる布を張る竹が通常3本ほどあり、それぞれの先には車輪が付き、それを足持ちなどと呼ばれる人が支える（写真2）。加賀獅子は、獅子の中に囃子方が入り演奏するのが古い形式であるといわれるが、今日では女性や子どもが囃子方を担うことが多くなり、獅子の外で演奏されることが増えているという。一方、他の獅子舞は、獅子頭を持つ人物を含め2～7人が一列に並び両手で布を持ち獅子の胴を構成する（写真3）。そのため、中の空間は人一人が並ぶ分しか存在しないので、獅子を構成するメンバー以外が入ることはない。形態の違いから、獅子の動きも加賀獅子と他の獅子舞では違いがある。どちらの獅子舞も、獅子の先頭にいる人物が獅子頭を動かし演舞を行うが、加賀獅子は胴体部分が巨大であるために胴体が大きな動きをみせることはほとんどない⁶。それに



写真3 法土寺の獅子舞
（2018年5月12日新湊にて筆者撮影）

比べると、加賀獅子以外の獅子舞では胴体全体が大きく動き、対戦相手の動きに対して獅子が全身で対応する演舞をみせる。

獅子頭のサイズにも違いがみられるが、概ね加賀獅子の方が全体的に大きいため頭部も大きい。中には20kg近い獅子頭もあるという。演舞では、獅子頭の部分が攻撃を行うことで対峙する演者との攻防を表現するため、獅子頭の動きは観客たちの評価に大きく影響する。

獅子はほとんどの地域において男性が担っているが、近年では担い手不足から女性の参加を認める例もある⁷。

●獅子あやし

獅子あやしは、地域ごとに様々な種類が登場する。獅子に対峙する演者は伝承地ごとに姿は様々であるが、天狗面や「シャンガン」などと呼ばれる毛の被り物をしている場合が比較的多い(写真4)。烏帽子やハチマキをしている場合もある。その他にも「ジジ」・「ババ」や「ベッサイ」、「サル」などの面が登場するところもある。呼び名は地域により違いがみられ、獅子あやし、シンドリ、天狗方、棒つかい、棒ふり等、様々である。服装も地域により様々であるが、加賀獅子は2章で説明するように流派武術の流入があり、武術の稽古着のような袴を着用している地域が多くみられる(写真5)。その他の獅子舞では野袴に、小手や胸



写真4 六渡寺の獅子舞における天狗
(2019年10月6日六渡寺地区にて筆者撮影)

当てをしている事例が多い。採り物の種類をあげると、加賀獅子であれば刀、薙刀、棒を基本に鎖鎌、鉄扇、三ッ剣、尺八なども登場する場合もある。その他の獅子舞も概ね棒、薙刀、刀を基本としており、鎖鎌も比較的にみられる。なお、棒や薙刀は、子ども用のものは短く作られていることが多い。

かつては花形的な役割であり、誰もが出来るような役割ではなく、今日でも男性が担うことが多いが、近年は女性が担う地域も出てきているのは獅子方と同様である。

●獅子方

薙刀方は笛と太鼓を基本に鉦が入る場合もあり、加賀獅子には三味線も入る。笛は3〜4名ほどが最低人数のようで、太鼓はだいたい1つを複数人が交代で叩いている場合が多い。太鼓は荷台に固定されていることが多いが、ワンボックス車の後部に固定している地域もみられた。

薙刀方への女性の参加は、調査時にもっとも多く地域でみられた。

II. 獅子を退治する武術

前述のとおり、北陸地方の百足獅子の特徴として、獅子あやしが採り物を用いて獅子を退治する芸態であることが挙げられる。その際に用いられる退治する術も、加賀獅子とその他の獅子舞で



写真5 加賀獅子の獅子あやし
(2018年11月3日共演会にて筆者撮影)

分けられる。その違いは、前者は明確に流派名を名乗り行われる、いわゆる流派武術の系譜にあることに対して、後者は管見の限りにおいて流派名を名乗っていないところにある。

民俗芸能と呼ばれ実践されるものには、かつては武術として行われていたと考えられる事例が存在する。民俗学や民俗芸能研究において大きく注目されることは無いが、しかし一部の研究者たちはその存在を指摘している（例えば、中村（1997）や細井（2014）など）。また、近世村落においても武術伝承は行われており、伝承者やその生活様式に合わせて多義的な実践がされていたこと（榎本 1994）、そのような伝承が近代以降も継続され今日の民俗芸能へとつながることが（田邊 2017）、スポーツ史やスポーツ人類学の研究者から指摘されている。報告者は、先行研究で示されるように、北陸地方の百足獅子における武術実践もまた、武士階級以外の者たちが担い、また今日まで継続される武術のあり方の一つではないかと考えている。

以下では、北陸地方の百足獅子の獅子あやしについて、武術との関係についてみていきたい。

1. 加賀獅子と流派武術の関り

加賀獅子と流派武術については、小倉による一連の研究がある（小倉 2005）。それによると、加賀獅子には現在でも数多くの流派があるが、その中でもっとも著名であり、弟子を多く育てたのは「土方流」と「半兵衛流」の2流派であるという。いずれも明治期に多くの弟子を育成している。以下に簡単に略歴を示す。

土方流は、幕末頃に浪人であった土方常輔が自身の身に付けていた武術を獅子舞に応用して生み出した流派である。土方家は浪人とされるが、加賀藩の藩校である経武館の師範であり、藩校と自身の持つ町道場で武術指南をしていた。土方家は心鏡流長刀鎌、袖岡流棒術、伯州流無拍子流棒

術を継承しており、これを藩校でも教授していたが、それらの武術を基に獅子舞専用の形を創作し、土方流として獅子舞の実践者らに教授した（小倉, 2005, pp.131-159）⁸。

一方、半兵衛流は農民出身で武術教授を行っていた町田半兵衛（1832-1909）が創始した流派である。町田半兵衛は、水野一伝流剣術、袖岡流棒術、無拍子流柔術を修めており、それらに鎖鎌や薙刀、居合等を加えて半兵衛流を創始し、近隣の獅子舞の実践者たちに教授した。1881（明治14）年から1892（明治25）年までの入門者を記した文書には門弟1040名が血判し署名しているというので、かなり流行っていた様子が伺える。半兵衛流では、免許を与えた者に紺地に「渡」という漢字と蜻蛉の絵、水玉を染め抜いた「ワタリトンボ」と呼ばれる袴の使用を認めたそうで、これを得るために祭礼前に入門する者たちも多かったようである。なお、半兵衛流は主として犀川以南に伝播した（小倉, 2005, pp.161-185）。

2. 加賀獅子以外の獅子舞における武術

加賀獅子とは対称的に、それ以外の獅子舞には流派武術との関わりが見られない。例外として、金沢市に接している南砺市旧福光町周辺に伝承される獅子舞は加賀型であり、土方流の系譜にある。しかしそのような例外を除くと、明確に流派を名乗ることや過去に武術家と関わりがあったという事例は、現状では見出せない。ただし、前章でみてきたように採り物の内容には棒、刀、剣、薙刀、弓、鎖鎌があり、また徒手も行う。つまり、総合武術のような多様な内容がみられるのである。特に、鎖鎌などは特殊な武器であり武器以外の用途も考えられないことから、何かしらの影響を流派武術から受けているのではないかと考えられる。もしくは流派を名乗らず、しかしある程度の体系的な武術伝承が行われていた可能性が考えられる。

3. 芸能武術としての北陸地方の百足獅子

以上のように、加賀獅子に関しては明確に流派武術の影響があり、加賀獅子以外の場合も、特定の流派名が名乗られないものの、武器を用いた技が展開されるものである。

田邊（2013）は、武術を含んだ民俗芸能の存在を参照しつつ、それらを「第三者の視線」を意識した上で行われる武術とし、「芸能武術」という概念を示した。芸能武術とは、いわば「第三者の視線」を意識し、技がそれに沿うように工夫されていくような武術といえる。今日、武術という語から連想されるものには、教育的側面や精神修養的側面が重視され学校教育などで実践される武道がある。また、そのような武道に対抗する形で登場した古武道も、近年ではメディア等で取り上げられることも多く、一般にも知られる。芸能武術という視点は、それらの今日的な武術実践が知られる中で、祭礼で行われる民俗芸能という実践のなかにも、武術の今日的な姿が存在していることを前景化させる。このような立場から北陸地方の百足獅子をみた場合、そこには今日でも生きた実践として行われる武術の姿があるのではないだろうか。武道でも古武道でもない、また違った日本の武術のあり方を北陸地方の百足獅子は示しているだろう。

III. 今日における獅子舞実践

本章では今日実践される獅子舞について、地域社会における祭礼と、獅子舞共演会などと呼ばれるイベントを取り挙げる。後者のような形態は今日の民族スポーツの実践において、それほど特殊なものではないだろう。各地で行われる民俗芸能大会をはじめ、主要駅などの駅前で民俗芸能の合同演舞会のような催しが行われることは、それほど珍しいことではなくなった。北陸地方の百足獅

子も、そのような競演会において演舞される。

以下、報告者が実際に観察をおこなった事例について報告する。

1. 祭礼における実践

北陸地方の百足獅子は、各地域社会の寺社等における祭礼において主として実践される。1章で簡単に述べたように、祭礼では神社での奉納演舞と町まわりの演舞で構成されている。以下、具体的な事例を示す。

●高岡市上二上の獅子舞

高岡市上二上の獅子舞は、二上町の上二上地区の獅子舞若連中により伝承される獅子舞で、4月の第3土曜日に行われる。従来は、地域の神社として二上山麓に鎮守される二上射水神社の祭礼日である4月23日に行われていたが、曜日が固定されない祭礼日では担い手たちが参加出来なくなり現在の期日となった。今日も祭礼当日に、まずは二上射水神社にて儀礼と奉納演舞を行うが、本来の神社の祭礼である築山行事と呼ばれる行事とは別個のものとなっている。なお、これは同じ二上町内の下二上地区も同様である。

獅子は5名で操られるもので、獅子あやしは天狗が行う。獅子は本来7名であったが、メンバーの減少により短くなった。囃子は太鼓と笛で、稀に鉦もあったが、ほとんどは太鼓と笛により行われる。従来は男性のみで担われていたが、2010年頃から女性も参加するようになり、現在は女性の方が多い。いずれの役割も担い手の数は非常に少なく、若連中を退会したメンバー（以下「OBOG」と略す）も協力する中で何とか担われている。練習は4月1日から行われ、水曜日を除くすべての日の夜に練習が行われる。祭礼1週間前には練習は深夜に及び、熱が入る。基本的には若連中内の先輩が後輩を指導することで伝承される。また、様々な道具の準備や祭礼当日の食事などは、

OBOG や上二上の女性たちが協力をしている。

祭礼当日は、天狗方は7時頃に、獅子方や囃子方は8時過ぎ頃に、それぞれ上二上公民館に集合して準備を始める。9時頃には公民館で出発前に一度演舞を行い、二上射水神社に向かう。自治会長や宮総代などの役付きのOB（OGで役付きの人物は今のところ存在しない）は、先に二上射水神社で神主のもとで儀礼を行っている。10時頃から二上射水神社での儀礼が始まり、その後宮内で奉納演舞を行う。それらが終わってから、地区内にある諏訪社の前で演舞を行い、その後町まわりとなる。町まわりは花への返礼と、上二上地区の各班長宅、老人ホームや保育園などで行われる。途中で昼休みと夕方の休憩を挟むものの、ほぼ1日掛かりで町まわりを行う。そして、夜には招待花の家で獅子がまわされる。その際には若連中のメンバーが思考を凝らした寸劇なども交えつつ、大きく盛り上がりを見せる。その後、公民館で獅子殺しが行われ、舞い納めとなる。そこから明け方近くまで直会が行われる。翌日は朝から公民館で後片付けがあり、昼に一度解散し、夜には花開きと呼ばれる祝儀の精算が行われる。

●射水市二口の獅子舞

射水市二口の獅子舞は、二口地区の二口獅子方青年団により伝承されている。開催は9月の第一土曜日にされているが、これは2014年からでそれ以前は9月8日に開催されていたという。地区内の熊野社の例祭となっており、特に夕方と夜に熊野社前で行われる火渡りが有名で、これを観に来る人も多い。二口の獅子舞も、朝から町まわりを行い、17時半からは熊野社において火渡りを行い、宮で儀礼と演舞、その後一度休憩を挟んでから、夜には招待花での演舞を行っていた。調査時の招待花はいずれも青年団メンバーの結婚であり、かなりの盛り上がりを見せていた。上二上の場合も同様であるが、結婚相手は獅子舞のメン

バーや観客を含めた人々の前で披露される。二口の場合は招待花の家で餅つきを行う演目があり、そのつきたての餅や事前に準備された紅白餅が、その家からその場にいるすべての人に配られる。地域社会に対する披露宴として行われている様子がみられた。

2. イベントにおける実践

民族スポーツが各種イベントにおいて登場することは、今日では珍しいことではない。昨今の、ユネスコにより認定される世界無形文化遺産の登録を目指す動きは、民族スポーツが実践される場の拡大にも関与しているといえるだろう。このような動きは民族スポーツを横につなぐ動きといえ、今日の実践の一つといえる。

北陸地方の百足獅子も、そのようなイベントにおいて演舞されている。以下、具体的な事例を示す。

●加賀獅子共演会

開催日：2018年11月3日、2019年8月31日（開催日は年により異なる）

場所：金沢駅前「もてなしドーム鼓門」前

主催者：加賀獅子保存協会、金沢市文化遺産活用推進実行委員会（後援：金沢市）

加賀獅子共演会（以下、「共演会」と略す）は、金沢駅前で行われる加賀獅子を中心とした演舞会である。駅前に演舞場を特設して行うため、観覧は無料である。また、駅の地下イベント広場では獅子頭や武器の展示がされる（写真6）。2018年の共演会は12時30分に開会の挨拶が行われ、14時40分の閉会の挨拶まで3時間弱行われた。演舞は時間により区切られており、司会の進行によって進められる。出演団体は、加賀獅子保存協会傘下の近岡町加賀獅子保存会、河原市町瑞穂獅子舞保存会、大野町獅子舞保存会に加え、ゲストとして能登半島から中能登町武部獅子舞保存会、志賀町の大福寺獅子舞保存会が参加していた。共



写真6 展示された獅子頭
(2018年11月3日共演会にて筆者撮影)

演会の主催である加賀獅子保存協会は、金沢市に伝承される加賀獅子団体の統括組織であり、傘下に各地域社会の伝承団体が組み込まれる形を取っている。金沢駅前ということで、多くの人々が行き交う中で演舞されるが、常時観客はおり活気ある中で行われていた。演舞する場は決まっており、観客と演舞場は区切られている状態で行われる。ただし、客席等が設置されている訳ではないので、出入りは自由である。花は金沢市などから入れられており、そのため口上も述べられる。

金沢まで北陸新幹線が開通したことにより、今日の金沢には多くの外国人が訪れる。それを意識してか、当日現地で配布されていた共演会のパンフレットには、加賀獅子や保存協会傘下の小坂獅子舞についての英語による文書も配布されていた。ただし、共演会を市が活発に宣伝している様子はない。確かに金沢市のHP内に加賀獅子に関する情報は掲載されるが、それは登録文化財として加賀獅子を説明するものであり、共演会について紹介するものではない（金沢市HP内「加賀獅子」、online）。各加賀獅子の祭礼スケジュールについては毎年掲載されるものの、インターネット等を通じた積極的なPR行っていない。なお、共演会は毎年開催されるが、これまでに何回開催されたのかは不明である。また、2018年度は文化庁による文化芸術振興費補助金の対象として開

催されている。

●金沢百万石まつり

開催日：毎年6月第一土曜日を中心とした金曜～日曜の3日間

場所：金沢駅前から香林坊周辺、金沢城までの公道

主催者：金沢市、金沢商工会議所により組織された金沢百万石まつり実行委員会

「金沢百万石まつり」（以下、「百万石まつり」と略す）は、金沢市で行われる大規模なイベントである。特に土曜日に行われる百万石行列がメインイベントで、毎年芸能人が初代金沢藩主前田利家と夫人お松の方に扮して、前田家の金沢城入城を再現する行列を組み、金沢駅前から街を練り歩き金沢城へ向かう（写真7）。行列には様々な団体が参加しているが、そこに加賀獅子保存協会も参加する。報告者が調査した2019年の百万石まつりは68回目であり、長田坤龍獅子保存会、金石通町獅子連、大野町獅子舞保存会、木越町獅子舞保存会、堅田町みどり獅子保存会の5団体から総勢308名参加していた。全体で2000人弱の大行列であることもあり、その進行は時間により決まっており、指定場所に到着すると演舞を行うといった形で進行していた。行列進行中も、時に沿道の人々に獅子頭が噛み付くなどの”サービス”を行っていた。最後は金沢城内の芝生で全加賀獅



写真7 百万石まつりにおける加賀獅子の演舞
(2019年6月1日百万石まつりにて筆者撮影)

子団体が一斉に演舞をして終了した。全5か所の演舞で1回が約10～15分ほどであり、正確に区切られていた。他の参加団体もそうであったが、演舞が終わり次第荷物を片付けて帰路についていた。また、報告者は参加出来なかったが、6月2日に金沢城内で行われる「加賀百万石『盆正月』」においても、泉町獅子舞保存会と千木町獅子舞保存会が演舞を行ったようだ。演舞場は道路であり、観客は沿道から観る。道路には警察官や実行委員のスタッフが配置されており、演舞場である道路に大きく入るような観客は注意を受けていた。花の紹介や向上はなかった。

百万石まつりに関しては金沢市が主催することもあり、対外向けにPRを大々的に行っている。HPも専門のものが毎年作られ、外国人観光客を見込んで6か国語の外国語ページが準備されている（金沢百万石まつり，online）。報告者は獅子舞の進行に並行して移動をしていたが、いずれの場所でも大勢の見物客がおり、多くの人々がその姿を写真に収めていた。

●高岡獅子舞大競演会

開催日：5月3日

場所：高岡駅前周辺

主催者：たかまち街づくり協議会

「高岡獅子舞大競演会」（以下「競演会」と略す）は、富山県高岡市で行われる獅子舞イベントで、2019年には44回目の開催を迎えた。2019年開催の競演会は第44回であり、13時頃から始まり19時半まで各所の会場で演舞が行われる。また、いくつかの団体は競演会後も夜遅くまで町まわりを行っていた。会場は高岡駅前周辺に3か所あり、参加6団体が時間によってそれぞれの場所で演舞を行う。また特別ステージとして、19～19時半にはホテルニューオータニ高岡裏広場でも演舞が行われた。2019年競演会には、高岡市から立野東町青年団、和田保育園、国吉光徳保育園が、射

水市からは法土寺町獅子舞保存会、四十物町獅子方若連中、富山市からは大塚獅子舞保存会が参加していた。各会場の進行は専門の司会が行っており、各団体の演舞は時間で区切られていたが、比較的余裕があるように組まれているようであった。金沢市の共演会とは違い、競演会は主催が保存会ではない。金沢市の場合は市で加賀獅子の統括保存会を作っているが、富山県下ではそのような統括組織は存在しない。そのため、毎年各団体の協力により開催されている。演舞場はそれぞれステージや仕切られた空間になっており、観客と演舞場は区切られる。客席はなく、出入りは自由に出来る。花は主催からあり、そのため口上も読み上げられていた。

前述したように、競演会のイベント自体は19時半に終了するのであるが、いくつかの団体は桐木町内の飲食店をまわって演舞を行っていた（写真8）。これは、花の返礼として行われたものである。夜も更けてきたこともあり、競演会以上の盛り上がりを見せる演舞もみられた。報告者は法土寺町獅子舞保存会について演舞を最後までみて回ったが、飲食店間の移動時も大合唱であり、まるで自分たちの地元の町まわりのような盛大な熱狂をみせていた。桐木町は飲食店街であり休日ということで人出もあり、そこにいる人々を巻き込みながら、彼らの演舞は行われていた。



写真8 競演会後に演舞する法土寺の獅子舞
（2019年5月3日高岡市にて筆者撮影）

以上のもの以外にも、花火や夏祭り等に合わせて獅子舞イベントが行われることが多い。例えば、射水市の「富山新港花火大会」や氷見市の「ひままつり」では、いずれも花火の前に複数の獅子舞団体が演舞を行う。また、2019年に南砺市で初めて開催された「南砺獅子舞 令和元年夏の陣」では、メインイベントとして「獅子舞共演会」が開催された。石川県下においても、今後継続して行うかは未定とアナウンスされていたが、野々市市でも2019年度の布市神社秋季例祭に合わせて、「四町合わせ」という市内の獅子舞を集めたイベントが行われた。

3. 祭礼とイベントにおける実践からみえること

以上のように、北陸地方の百足獅子は、比較的担い手以外の人々にも身近な存在として今日もあり、様々に触れる機会が存在している。地域における祭礼も個々に差はあるが、比較的地域外の人々が訪れる場合も見られ、またイベントに関しては他のコンテンツと合わせて組まれることや駅前等で行われることから、関係者以外も見に来る。報告者は日本の祭礼をこれまでも調査してきたが、例えば三匹獅子舞などはそれが伝承される地域社会内で完結していることも多く、地域外の人々が見る機会がごく限られている。しかし、北陸地方の百足獅子は地域社会外の人々にも触れる機会が多く感じられる。これは、冒頭でも述べたように今日でも稀にみる量の伝承が続いており、担い手不足の問題を抱えるものの、担い手以外の人々を含め、その存在を多くの人々に認知されているためではないかと考えられる。

祭礼時とイベント時との大きな差異は、花の有無、その花への返礼として行われる町まわり、口上の在り方にあるだろう。祭礼の場合は、花は事前に担い手たちに渡されているか、当日町まわりで訪れた際にメンバーに手渡される。花の内容（金額や物品の量）によって、演舞や口上が読み

上げられる時の盛り上がりも違う。特に、招待花のような大きな花は、その年の祭礼におけるメインイベントとも呼べる盛り上がりを見せることは前述のとおりである。競演会後に報告者がみた、法土寺町獅子舞保存会による町まわりの盛り上がりも、飲食店から贈られた花が祭礼時のそれと同様の意味を持っていたためであろう。花は伝承団体にとっては活動資金であり、また地域社会とのつながりを生む機能もある。他方、イベントにおける花は主催者からの御礼という形であり、その意味では祭礼時と変わらないともいえるが、とはいえ形式的なものに感じた。口上も読み上げられるが、それは祭礼時の再現としてあるようにみえる。

また、演舞する場やその在り方も祭礼とイベントでは違いがある。例えば、祭礼時の神社や町まわりにおける演舞の場は、地形や道の広さに影響されるが囲いのようなものはない。観客たちは各々好きな場所から、その演舞の邪魔にならないように見物する。そのため、様子を見に来たOBOGが周囲に煽られて演舞に参加することも珍しくない。他方、イベントの場合は明確に演舞する場は区切られる。前述のような「飛び入り」はあり得ないだろう。また、いずれの場合も観客たちの視線の中で演舞が行われるが、その在り方に違いがある可能性もあるだろう。どのような人々にみられているのか、またどのような位置から観られているか等、場の在り方や観客の属性に影響を受ける可能性は十分に考えられる。例えば、競演会には、上二上の獅子舞OBや新湊内の他地区の担い手たちも来ていた。いずれも法土寺町獅子舞保存会の町まわりの際に起こった熱狂に感心していたが、他の獅子舞の様子を見ることで自分たちの芸と比較する視点は生まれているだろう。そのような視線の中で演舞することが、彼らにとってどのように意識され演舞に影響しているのかも考える必要がありそうだ。

IV. まとめ

本稿では、北陸地方に伝承される獅子舞について、今日における実態を報告した。それらを踏まえて、今後の課題として2つの視点を示して終わりたい。

(1) 今日的実践

本稿を通じてみてきたように、北陸地方の百足獅子は担い手不足という、今日の民族スポーツの多くが抱える問題を持ちつつも、各地域社会で継続されている。

獅子舞を行う意味がかつてのように生業と結びつくことは少ないと思われるが、しかし担い手たちは少なからぬ犠牲を払いつつ継続している。いわゆる失われていく伝統といったものではなく、活気があり担う人々の日常と固く結びついているように報告者は感じた。招待花のような目出度い時を、地域社会との関りの中で祝う様子などは、獅子舞が今日でも彼らの生活に近い存在であることを示しているといえるだろう。他方、担い手不足により伝承が中断されている獅子舞が存在するのも事実である。しかし、そのような中で担い手たちが様々な葛藤の中で工夫をしている。例えば、女性が獅子あやしを担うような地域も徐々に出てきているが、注7で示した新聞記事にあるような女性だけの獅子の登場は、担い手不足による成員の拡大という葛藤の上で行われた、新たな獅子舞に対する工夫とも取れる。このような獅子舞の在り方が、新たな技の登場やその在り方などを生むだろう。

また、北陸地方の百足獅子は従来想定されたような「閉じた文化」としてではなく、他地域とも関係性を結びながら行われる横断的であり動的なものである。「3.3」でまとめたように、獅子舞は今日でも担い手外の人々に対しても比較的身近

な存在であり、担い手たちにとっては何とかして継続したい「楽しみ」として存在しているのではないだろうか。そのような中で、獅子や獅子あやしである天狗になることとは、担い手にとっていったいどのような意味があるのであろうか。また、獅子や天狗をどのように捉えているのか。技の習得や、獅子頭や天狗面などのものや場などの環境を含めた、非人間との付き合い方など、より担い手に近い視点からの分析が今後必要になるであろう。

(2) 生活と密着した武術伝承

加賀獅子の武術は、流派武術の伝承者が加賀獅子に合わせて考案し伝授したものであった。武術として専門家を育てる一方で、積極的に祭礼向けに自らの伝承を改変して民衆に対して教授することで弟子の拡大を図った。ここには、武術家が身に付けていた武術を時代の動向に合わせて上手く活用した、処世術がみられる。明治時代以降、「旧弊」とされた武術は、武道となり実践される場の中心を警察や学校として生き残る。他方で、そのような流れに乗れなかった流派武術は衰退していき、生業としては成り立たなくなった。民衆に教授をして子弟拡大を行った土方家は常総の代に、町田半兵衛も息子の代に武術伝授は止めている。明治という新時代を武術家たちがいかに生きたかが、加賀獅子との関わりからみえてくる。

土方流や半兵衛流の系譜は、明治以降も弟子たちにより大きく拡大していく。今日残る棒ふりの多くは、土方流と半兵衛流から派生したものが多く⁹。土方家や町田半兵衛による流派武術の伝承は近代の中で衰退した。しかし、棒ふりとして継承された両流派は、近代化以降も加賀獅子の担い手たちに魅力を示し、今日も実践される。「2.3」で示したように、芸能武術としてこれらの実践をみたとき、「武術から武道へ」という従来の近代化論とは別の、武術の近代化が見えてくる可能性

があることを指摘しておきたい。

【文献】

榎本鐘司 1994「北信濃における無雙直傳流の伝承について：江戸時代村落の武術と「境界性」」、『スポーツ史研究』7: 21-36.

はくい獅子舞保存活性化実行委員会 (online), <http://hakui-shishimai.com/> (accessed 2019-11-15)

北國新聞「女子だけで初、獅子舞 羽咋・千代町、10月5日の祭礼 小中生13人練習」、北國新聞 web 版 2019年9月25日記事 (online), <https://www.hokkoku.co.jp/subpage/H20190925104.htm?fbclid=IwAR02Ay66ujZFM-7WMj0MUwvqP3HjCPshHLGZpPypJRepigMS3CTDR6qx-McXQ> (accessed 2019-10-27)

橋本裕之 2006「氷見獅子源流考一起源としての王の舞一」、富山民俗の会編『富山の民俗学は今一富山民俗の会50周年記念論文集』, 桂書房, 61-79.

平島朱美

2016「日本のコミュニティにおける獅子舞伝承の今日的意義」、『国際日本学論叢』13: 92-121.

2019「富山県西部の獅子舞の現状と課題一高岡市南部地域獅子舞実態調査と獅子舞マップ作製の意義一」、『民俗芸能研究』第66号: 27-50.

細井雅希 2014「鞍馬流棒術に見る棒術の芸能化」、『大分県地方史』221: 1-27.

石川県教育委員会文化課・石川県内獅子舞緊急調査委員会編 1986『石川県の獅子舞 獅子舞緊急調査報告書』, 石川県教育委員会.

金沢百万石まつり (online), <http://100mangoku.net/index.html> (accessed 2019-9-5)

金沢市 HP 内「加賀獅子」(online), <https://www4.city.kanazawa.lg.jp/s/11104/bunkazaimain/shiteibunkazai/minzoku/kagajishi.html> (accessed 2020-4-3)

仲井幸二郎 他編 1981『民俗芸能事典』, 東京堂出版.

中村茂子 1997「民俗芸能にみる棒振り一発生と展開一」、『藝能史研究』136: 46-60.

小熊英二 2019『地域をまわって考えたこと』, 東京書籍.

小倉學

1984『祭りと民俗』, 岩崎美術社.

2005『加賀・能登の民俗 小倉學著作集第2巻 民俗芸能』, 瑞木書房.

佐伯安一 2002『富山民俗の位相』, 桂書房.

田邊元

2013「「芸能武術」論序説：長谷川流棒術と田山花踊りの「棒振り」を事例として」、『スポーツ人類学研究』15: 45-66.

2017「村落における武術伝承組織の検討：神道香取流を事例として」、『体育学研究』62(2): 631-646.

富山県教育委員会編

1979『富山県の獅子舞』, 富山県郷土史会.

2006『とやまの獅子舞』, https://toyama-bunkaisan.jp/_wp/wp-content/uploads/2019/03/shishimai.pdf (accessed 2019-11-16)

とやまの文化遺産 (online), <https://toyama-bunkaisan.jp/> (accessed 2019-11-15)

富山県の獅子舞活性化マスタープラン研究委員会 (富山県教育委員会文化財課) 編 2006『富山県の獅子舞芸能と祭礼一獅子の芸能と行事の現状一』, 富山県教育委員会.

【注】

1 例えば、民俗芸能の体系的な事典である仲井幸二郎らによる『民俗芸能事典』には都道府県別の目次が設けられているが、富山県・石川県ともに獅子舞は掲載されていない。

2 ただし、佐伯は富山県下の百足獅子を考察する際に、石川県下の百足獅子との共通点も考慮に入れた指摘をしている (佐伯, 2002, p.265)。

3 加賀獅子という名称は、金沢市内に伝承される獅子舞の統括団体「加賀獅子保存協会」が使用するものであり、例えば隣接する野々市市や白山市ではその名乗りを使用していない。しかし、便宜的に「加賀獅子系」として括られるのが一般的である。どこかの時点で加賀獅子という名称が生まれたと考えられるが、報告者は現時点ではまだこの点を明らかに出来ていない。本稿でも、他に倣い加賀獅子と呼称する。

4 氷見市と隣接する羽咋市神子原の獅子舞は、氷見あたりから習ったといわれているため「越中獅子」と区分される (はくい獅子舞保存活性化実行委員会, online)。

5 とやまの文化遺産 HP によれば、「約850件」活動中だという (とやまの文化遺産, online)。

6 ただし、金沢市に隣接する南砺市旧福光町の獅子舞はカヤが巨大な加賀獅子と同様の形態であるが、ややサイズは小さく、胴体部分も頭と一緒に動く。

7 例えば、次の新聞記事を参照。「女子だけで初、獅子舞 羽咋・千代町、10月5日の祭礼 小中生13人練習」、北國新聞 web 版 2019年9月25日記事 (北國新聞, online)。

8 なお、報告者の調査では山岡鉄舟創始の無刀流三代で、第四高等学校師範であった石川龍三は、はじめ土方常輔の孫にあたる常総の弟子であり、前述流派武術の目録や免許を明治中頃に承けている。これらの伝書類は、金沢市史料館「春風館文庫」に収蔵されている。

9 例えば、土方流から派生した大島流は大島伊右衛門により創始されたが、その後三代に渡り多くの加賀獅子伝承団体に指導を行った。また、柔術の天神真揚流を習得していた田村他一郎はそれを基に棒ふりを考案し、息子の武雄はそこに渋川流剣詩舞を加え、平成の初め頃まで普及に尽力していた (小倉, 2005, pp.124-127)。